

序

清朝末期からの中国文芸界を特徴づけるもののひとつは、定期刊行物の出現である。小説を掲載する媒体としての新聞であり雑誌であった。特に小説専門雑誌のあいつく創刊は空前といってよい。創作作品、翻訳作品を中心にそのほかを集めて定期的に刊行する。この雑誌という形態は新しいものだ。しかも、中国最初の近代的小説雑誌は、梁啓超が日本横浜ではじめた。いうまでもなく『新小説』である。それを継いだのが上海の『繡像小説』であり『月月小説』『遊戯世界』『小説林』『小説時報』『小説月報』などの雑誌になる。中華民国初期にかけても雑誌発行の隆盛はつづく。

雑誌では、長編小説ならば連載される。読者の好評を得ることができれば、それをまとめて単行本で刊行する。雑誌連載から単行本へ、という方向が成立したのもこの清末民初という時期だった。

逆にいえば、新聞雑誌連載だけで終了した作品の方が多数にのぼる。単行本にならない小説群の存在は、現在から見れば当たり前の現象にすぎない。だが、小説研究をおこなうばあい、単行本に注目していればよいという状況に変化が生じたということだ。新聞雑誌にまで研究の対象を拡げる必要がでてくる。

阿英は、小説専門雑誌の出現は清末文芸界の特徴のひとつだとはっきり認識して文章を書いていた。彼の著作である『晚清小説史』(1937)は、はじめの部分で雑誌群の創刊に言及する。『晚清文藝報刊述略』(1958)の著作がある。さらに、阿英「晚清小説目」(『晚清戯曲小説目』1954)にも雑誌から作品を収録している。さらに、創作と翻訳に区分けする。翻訳小説に注目しているのも阿英の見識の高さを表わしている。彼の目録が研究界では長年にわたって基礎資料として利用されてきた理由でもある。

阿英の著作、目録の題名をみてわかるとおり、時期を清末に限っている。当時は

そこに注目したのは画期的なことだった。高く評価されるべき点だ。ただし、次の民国初期と連なっている側面が無視され、誰もそのことを疑問に思わない。各種文学史では清末を古典の末尾に置く、あるいは五四文学の直前に存在しただけの添え物風に扱う。清末と民初が連続しているという視点が成立しにくかった。

以上のふたつを視野に置き、小説目録を編集する必要があった。雑誌を主要な対象にし、単行本も当然ながら収録する。それでこそ時代の特徴を生かした基礎資料となるはずだ。そう考えて作業をはじめたが、すぐに壁にぶつかる。中国で繁栄した雑誌だ。それに掲載された小説をひとつひとつ目録に収録しようという。

編集方針は明確だ。しかし、日本で実行するのは、実際には常識から考えて困難である。雑誌のいくつかは日本の図書館にあるにしても、大多数は目にすることができない。新聞は、まず見るのが不可能だ。かといって、いままでのように阿英の晩清小説目だけに依拠するわけにはいかない。しかたがない。必要に迫られて実行したのは、次善の方法だ。すでに刊行されている目録類からも採取することにした。間違いが生じるだろう。しかし、ないよりもまし、というのが当面の方針だった。実物に到達する手がかりにはなるはずだ。その役に立てばよい。小説目録はあくまでも工具だ。最初から完璧を求めては前進できない。

翻訳作品には、わかる限り原作について注記するように努力した。予想よりも収録件数が多くなった。その結果が、『清末民初小説目録』(1988)である。

その後、増補と訂正を続ける。2次資料を利用したからそれらの文献名も情報として書き加える。これが追加作業のひとつだ。たどっていけばどの文献に記載があるかわかるようにした。実物で確認できない作品が多い。典拠を明らかにすることは自分にとっても必要なのだ。ひとりではできることには限りがある。そこに援助の手をさしのべてくれたのが渡辺浩司氏であった。

渡辺氏からもらった最初のご指摘は手書きの原稿だった記憶がある。のちにワープロ原稿になり電子メールに変わった。通信の手段は変化した。だが、変わらないのは、根拠となる文献を添えての具体的な訂正、不足のご指摘である。私が渡辺氏による訂正を信頼する理由だ。目録の増補訂正作業にとって大いに役立っていることはいうまでもない。感謝するばかりだ。

それらをできるだけ明記しながら、『新編清末民初小説目録』(1997)と『新編増補清末民初小説目録』(済南・齊魯書社2002)ができた。後者は中国で発行されたから、海外の研究者からもご指摘をいただくようになった。

渡辺氏からのご教示は、現在も続いている。それは、清末民初小説についてはまだ探求の余地があることを示している。終わりが無いのだ。

探索の余地というにはあまりの広さにどうしようもない空白があることに気づく。翻訳小説だ。翻訳小説の隆盛も清末文芸界の特徴のひとつである。そういうだけならば簡単だ。しかし、困難な問題が横たわっている。訳と表示しているが原作を特定できないものも多い。原作者、原作名を明記していない作品も多く存在する。あの阿英でさえ手をつけかねていたといえいくらかは理解してもらえるだろうか。翻訳と書いていないから創作だと考えると間違ふ。創作と翻訳の区別がつかない。

私の体験した例をひとつだけあげよう。

林紓たちが翻訳したシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」など、あるいはイブセンの「幽霊」である。これらあまりにも有名な戯曲を、林紓らは小説に変えて漢訳した。そういつて批判が集中している。ほとんど90年近くの長期間にわたり非難の声が続いていた。阿英も、批判をした人々のなかに含まれる。林紓は外国文学について無知であると鞭打ってきた事実が存在する。だが、林紓が翻訳の際に採用した原作は、クイラー=クーチ、またデルによる小説化本であった。研究の基礎が間違っていた。林紓たちに濡れ衣を着せたのである。研究者たちは林紓について論じることに忙しかった。この簡単な実例は、そのことを私たちに知らせてくれる。原作の探索という基礎研究の重要さを私は強調したいのだ。

渡辺氏は、現在、清末民初小説翻訳の分野において精力的に研究を進められている。特定の作品、翻訳家についてではなく、対象が広範囲にわたっているところにその特徴がある。翻訳の表示がない作品について原作を指摘するという難しい課題をこなしている。翻訳作品をあつかった研究者ならば、どれだけ手間とヒマがかかるかを容易に理解するに違いない。

論文には「新しい発見」が不可欠だ。そうはいっても、実行するのはむづかしい。だが、氏の論文のひとつひとつには、その「新しい発見」が盛り込まれている。今まで研究者のひとりとして指摘したことがない事柄ばかりだ。清末民初翻訳ミステリという分野には、私の知る限り中国にも研究者は存在しない。それほど貴重なのである。

渡辺氏が研究の途中であるのは理解しているつもりだ。しかし、それらのすばらしい業績は、より広く知られる必要がある。日本の学術研究の状況を世界に示すためにとりあえずまとめて欲しい。私は、ひそかにそう思っていた。このたび、私の

希望が実現したことはまことにうれしい。

2010年1月

樽本照雄